

読書活動への扉を開く！

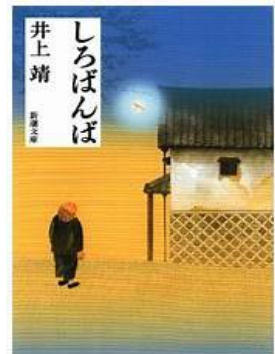
No 31

桑村小学校令和5年7月3日 文責 稲木

本はタイムマシーン

私たちは、本を読むことで、過去にも未来にも行くことができます。そのほかにも、フィクション、ノンフィクション、SF、論説、哲学、歴史・・・さまざまな分野に行くことができるのです。物語（小説）は読んでいる私たちをその時代、その世界に誘ってくれます。本は、面白く、また不思議な存在です。

主人公が動き出す。本を開くたびに風景が変わっていく。そんな感触を味わったのは、「しろばんば」（井上靖作）です。旧天城湯ヶ島町（今の伊豆市）に勤めたこともあり、天城の山々の風景や田畑の様子を見ていました。洪作をめぐる多彩な登場人物の描写がすばらしく、容姿や所作の違いまでが、ありありと眼前に浮かんでくるのには大変驚きました。ページを開くたびに、伊豆の山々の風景が浮かび、その風景の中を登場人物が動き出す・・・そんな感覚を味わいました。



「夏の庭」（湯本香樹実作）もページを広げるたびに、登場人物の一人一人が動き出し、さまざまな出来事が起こります。小学6年の3人の少年たちが「人が死ぬところが見たい」という純粋な好奇心から近くに住む独居老人を観察しだす、というところからストーリーが始まっていきます。少年たちの心情が揺れ、大きく動くのは、文章のもつ力だと思います。死をテーマにしていますが、少年たちの一夏の思い出を描いた、爽やかで夏らしいストーリーとなっています。すぐれた叙述によって、登場人物の心情の動きを表現していて、印象に残る本でした。

最後に、「思考の整理学」（外山滋比古作）を紹介します。この本は考え方について書かれた本です。「思考の整理には忘却が最も有効である」と書いてありました。衝撃的な言葉でした。忘れ上手になることで、着想の古典化を作り上げるというのです。「いったんノートに書いたら、一度忘れて記憶のろ過装置にかける、そうすることで、不要なものは取り除かれ、純化された思考だけが残る。」そう考えると、学校では、子供たちは授業で学んだことを休み時間に忘れ、忘れるからこそ不要なことは取り除かれ、大事な部分だけが残るということになります。このような考え方に触れ、思考の面白さを感じました。



読書は、不思議で面白い世界に誘ってくれるものだなと思います。

----- 切 り 取 り 線 -----

「読書活動の扉を開く」（7月 3日号）を読んだ感想
()年()